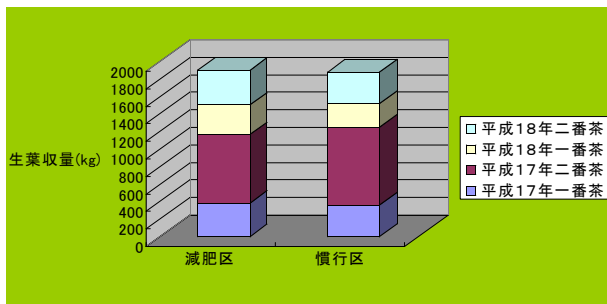


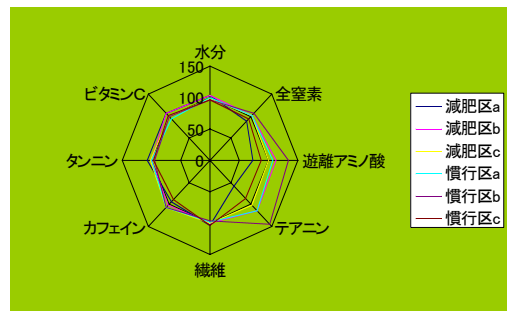
茶園の減化学肥料と病害虫総合制御 (IPM)

硝酸化成抑制剤入り肥料を使い、窒素の年間施用量を慣行施肥の 45kg から 25 % 減肥した 33.8kg にしても、慣行施肥を上回る収量が得られ、生葉の成分にも差が見られませんでした。

5 種類の減農薬技術を体系化し、農薬使用量を慣行の 5 分の 1 にした防除体系の現地実証を行いました。すると、炭疽病が少なく経過し、ハダニ、ヨコバイも徐々に少なくなり、天敵の増加が見られました。一番茶収量も慣行と比べ差はありませんでした。



減肥区と慣行区の生葉収量



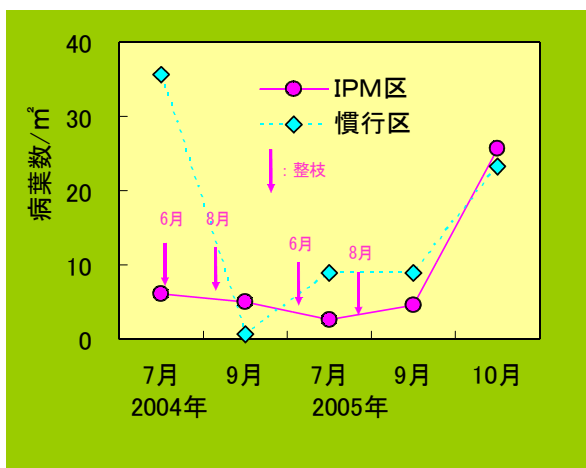
平成18年一番茶の生葉成分

組み合わせた減農薬技術の内訳 (IPM区)

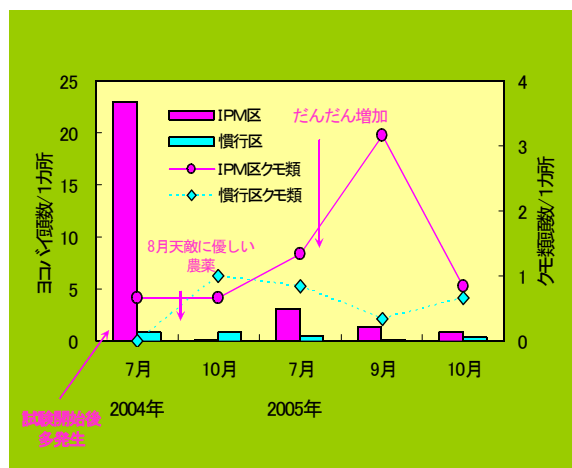
- ① 性フェロモン剤の利用・・・ハマキムシ類抑制
- ② 6月および8月の整枝・・・炭疽病・ヨコバイなどの抑制
- ③ 10月中旬の整枝・・・チャドクガの抑制
- ④ 一番茶萌芽期寄生率率 ≤ 20% 防除削減・・・カンザワハダニ
- ⑤ 天敵 (ハダニアザミヤカ・天類) に影響の少ない薬剤



IPMの現地実証を行った茶園



IPM区と慣行区の炭疽病の推移



IPM区と慣行区のチャノドリヒメヨコバイと天敵の推移

(茶業特産研究所 生産環境担当・加工利用担当 TEL 042-936-1351)